

一 評論

【解答例】

- (一) (1) 堅固 (2) 維持 (3) 浸透 (4) 発達 (5) 描写
- (二) ことばは一般的に、ことば以外の物事と結びつき物事を指示し表現してはじめて機能すると思われるから。(49字)
- (三) 「私たち以外のあり方」が常に存在するものの、それを「私たち」に回収すると同時に、そうではない対立項を際限なく拡大していかざるをえないあり方。(70字)
- (四) ことばは人類がある時期手に入れたもので、誕生や獲得には歴史を必要とする以上、物事を全て分割できるという万能さはないことが露わになること。(68字)
- (五) 両者は、物事を自らの外部に位置づけつつ内部に取り込む対関係を常に反復する点で共通することを示すため。(50字)

【解説】

- (一) 例年以上に易しい。完答が望ましい。
- (二) 傍線部直後の一文「ことばは、ことば以外の物や事柄と結びつくことで、ことばとしての働きを持つのではないかと反論されるかもしれない」を踏まえる。一般的には、ことばはことば以外の物や事柄と結びつくことで初めて機能するものである、と理解されており、「ことばの外部がありえない」という筆者の言葉はそうした理解からすると非常識であることが字数制限の範囲内で説明できればよい。
- (三) 傍線部前段落冒頭の『私たち』というあり方は、『私たち』と『それ以外のあり方』を同時に産み出すことを繰り返していくあり方だからこそ、その外がありえないのである」という一文や、傍線部のある段落冒頭の『私たち』は、とりあえず『外』を立ち上げつつも、その『外』を自らに回収しつつ、さらにまた新たな『外』を立ち上げ続ける。そして『私たち』は、その反復の中で、不可視の背景へと移動し続ける。この更新の繰り返しこそが、『私たち』というあり方に他ならない」といった箇所をもとに考える。「私たち」は「私たち以外のあり方」を常に「私たち」に回収するが、傍線部に「どこまでも行っても地平線のこちら側であり続ける」とあるように、いくら回収を続けても、不断に「私たち以外のあり方」が生まれてくることを指摘できればよい。
- (四) まずは傍線直後「ことばは、もちろん『すべて』ではないのである。」の一文に注目する。その上で、ことば(概念)が持つ分節化の力について指摘する一方で、ことばが万能(=「すべて」)ではないのは、それが歴史的に獲得されたものであるからだを根拠づける。
- (五) 筆者が「私たち」と「ことば」に共通性を見出していることを指摘することが軸となる。その共通性を端的に説明しているのが、P6二段落目の「落差の反復」という言葉であり、その内容を説明すればよい。すなわち「物や事柄を外部に位置づけるという発想」と「物や事柄を内部にすべて取り込んでしまうという発想」とが「一つに組み合わせたり、かつその対関係が終わりなき繰り返いに巻き込まれること」を制限字数内で説明する。

二 小説

【解答例】

- (一) (1) いじらしいほど汚れなく (2) たどたどしく、言葉にするのが難しい
- (二) 孤独で小屋にいる中、わざわざ雪溪から雪を集めて溶かす以外水を手に入れる方法がなかったから。(45字)
- (三) 濃霧が晴れて現れた美しい星空から、俗世を離れ神話を思わせるような崇高さが感じられたから。(44字)
- (四) 荘厳な景色に人間と自然がひとつであった始原の状態を体感し、自己の人間と自然への考え方の偏狭さと、人間の尊さを知ったから。(60字)
- (五) 神話的な夢想の中で自然や人間の尊さを知り、〈愛〉をも感じ取れることを期待したが、その前に突然現実に戻されてしまったから。(60字)

【解説】

- (一) 辞書的な意味を答えるのが無難だが、文脈に配慮し、多少誇張した表現でもよいだろう。
- (二) 他に登山者がいなく「ひとりぼっち」で「心細かった」という心情と、水を得るために雪溪まで向かわなければいけない状況に対する疲労感との二点に言及する。心情の把握は難しくないが、「ぼく」の状況を字数内に端的にまとめることが求められる。
- (三) 「神話の世界」という傍線部中の語句をいかに説明するかが解答の要である。「ぼく」が星空を見て感じている「宇宙の崇高さ」と、傍線部直後の「下界の意識はこれっぽっちも残っていなかった」という述懐との対比が鍵となる。
- (四) 傍線部中の「あたらしい眼で、人間を眺める」という部分に着目し、「ぼく」が得た「人間」に対する認識を簡潔にまとめる。「ぼく」は、「対立という考えこそ、囚われたせまい考えなのじゃなかろうか」というように、「人間」と「自然」の関係の捉え方を新たにし、さらに、人間を「哀れな、はかない」「尊むべき」存在として捉え直している。この二点が解答の軸となるだろう。また、そのような新たな認識を得た契機が「自然と人間がひとつであった状態をみた」ことだという点にも忘れずに言及する。
- (五) 傍線部は〈愛〉という認識のあり方を「ぼく」が自問するような述懐部分であるが、〈愛〉の認識がいかなるものであるのかという内実は、本文中には詳しく書かれていない。そのため、〈愛〉について踏み込んで説明するよりも、「ぼく」が傍線部のような自問に至った経緯を、本文の展開に即して説明することが望ましいだろう。夢想の中で天地創造のありさまをまざまざと感じていた「ぼく」は、「今こそ〈愛〉が生れるのではないか？」と〈愛〉の誕生に触れ得る期待を感じているが、その手前で不意に現実に帰ってしまう。〈愛〉の認識が果たせずに終わるまでの一連の流れの中で、「僕」は〈愛〉がいかに触れ難いものであるかを知ることとなった、という趣旨で解答をまとめるとよいだろう。

三 古文

【解答例】

- (一) (1) 気立てがすばらしくて (2) 親しみやすく (3) 口やかましいほどに
- (二) 聖房が、もらった着物を乞食に与えたから。(20字)
- (三) 聖房には、自分が立派だと一目置かれるのは不本意だったから。(29字)
- (四) あなたはどなたでいらっしゃるのでしょうか
- (五) 名利を求めず、あえて道心や素性を隠して施しや名歌を詠んだりする行為を、恐れ多いことだと賞賛している。(50字)

【解説】

- (一) 全て辞書的な訳をはみ出さない。ただし、文脈に留意する必要がある。
- (二) 本文2段落目に手がかりがある。「乞食に着物を与えていたから」というのが解答の軸になるが、字数制限が厳しく、主語を補うべきなのか、乞食が寒さに苦しんでいるという内容を補えばよいのか、判断に迷う。
- (三) 「聖房」が周囲から「よしある人」(奥ゆかしくて立派な人)と思われるのが「よにもほいなげ」(とても不本意)であったことが指摘できればよいが、字数制限が厳しい。
- (四) 尊敬語「おはす」に留意して訳するのが最大のポイントと思われる。現在推量の「らむ」は訳しにくい。
- (五) 説話による価値判断は最終段落にあることが大半である。「聖房」が、もらった着物をどう処理していた(「ことに寒くかはゆげなる乞食に、着物を脱ぎくれて」)か、歌人としての名誉を望んでいなかった(「わざと名をしづめて」)旨を筆者が賞賛している(「かしこく侍れ」)ことを書ければ十分だろう。

四 漢文

【解答例】

- (一) (1) すなわち (2) いかん
- (二) (a) ししやをいましめていわく
(b) とおるをえず
- (三) 政宗が今すぐ出発して秀吉にお目にかからなければならない
- (四) ・天皇から天下を任された秀吉に対し、政宗があいさつの使者すらよこさない点。
・秀吉に忠誠を誓った葦名義広に対し、政宗が戦争を仕掛けている点。
- (五) 今臣従しなければ、北条氏討伐後、政宗も討つつもりであること。(30字)

【解説】

- (一) 基本的な語の読みを問うている。確実に得点したい。なお、(2)の「如何」は受験参考書的には「どうしたらよいか」と、手段・方法を問う表現と説明されるが、「何如」と同様に「どのようなか」と状態を問う意味で用いられることもある。本文はそのケースに該当する。
- (二) (a)「戒」が動詞、「使者」が目的語という関係になっていることが分かれば易しい。
(b)直前に「路塞がりて」とあることもヒントになるが、「得」の直後に動詞がある場合、「得」は「(～を)う」と読み、助動詞的に「～できる」と解釈することが多い。ここでは「とおるをえず」と読んで「通れなかった」の意になる。
- (三) 句法のポイントは「不可不A」。「Aしないわけにはいかない」「Aしなければならない」などと訳す。もう一つのポイントは設問の条件。「誰が」「誰に」を明示せよとあるが、「謁」は「拝謁」という言葉があるように、目上の者に面会する意であり、傍線部以降で「秀吉に謁せんと請ふ」などとあるように、本文で「謁」は「秀吉に面会する」という意味で使われている。次に「誰が」の対象は、名もない使い走りの使者というよりも、使者を派遣している政宗と考えるのが妥当であろう。
- (四) 秀吉の発言をまとめるだけで、字数制限もないので易しい。秀吉は政宗に対し①なぜ自分の支配下に入らないのか、②なぜ自分の支配下にある葦名義広と事を構えるのか、を責めていることを本文から読み取る。
- (五) 「北条の次に征伐するのは伊達」ということが書ければ受験生としてはよいだろう。今すぐ豊臣の軍門に降れ、という内容まで明記するのは字数制限上難しい。